

「おはん、お米とわたし」

2

1

私のご飯でつながる家族
 東陽中学校 三年 中田 愛子
 いつもありがとう。いつもごめんね。
 私が小学五年生の時、祖母が倒れて不自由
 になっから、毎日こんな調子だ。祖母は脳
 卒中を患い、その後遺症で、治った今でも手
 足のしびれで歩行、作業を一人でほできない。
 最近では、毎日一本注射までうっている。そ
 んな祖母が私に感謝と、謝罪の言葉を言うとき
 は、決まって食事が関わっていた。
 はい、口開けてし。
 五年生のとき、祖母は病院に入院していた。
 話ができるものの、横になっ、たまま自分で
 食事もできない。祖母のため、学校から帰った
 ら、すぐ病院に行く毎日。祖母が抜けた穴を埋
 めるために、私はお米をといで炊飯機にセッ
 トして、祖母に会いに行く。そして六時頃、
 病院食が運ばれてきたら、私がスプーンで祖
 母にそゆを食べさせる。
 いつもありがとう。いつもごめんね。

別に、ばあちゃん、のせいじゃないじゃない。祖母は、当たり前だが何も悪くない。なに誰よりも年をとれば、病気にくらいなるものだ。そう理解し、毎日病院に行きました。いいなあ。病院の「ご飯」で、け、こうふわふわしてるよね。おなか空いたら、一口食べる？

「いいの？ いただきます。」

お腹が空いたまま病院に直行して、いた私は、毎日祖母の「ご飯」を一口だけもらっていた。食べたか、だから、というところもあるが、私も一緒に食べた方が、家にいるみたいで安心するかもしれないと、思っていました。自分一人では何もできない祖母は、毎日「退屈」だろうな、寂しいだろうなと、毎日祖母と「ご飯」を食べた。毎日もらう「一口」の「ご飯」は、とても甘く感じられました。

「ご飯」くらいしか、楽しさがなくてね。

これも、よく言っていた言葉だ。食事以外は

辛いリビリと睡眠ばかり。確かにと納得
 できました。一日の中の唯一の楽しみである食事
 は、私が食べさせてあげたい。そう思うよう
 になつた。
 そんな毎日を通じ、冬になつた。手術も
 無事終わり、あとは退院を待つだけだ。
 ようやくこの忙しい生活が終わる。家で一緒
 に、またご飯が食べられる。喜びと安心が心
 を満たしていた。あと一週間、あと三日、あ
 と二日、あと一日。退院前日の夜、祖母に
 異変が起きました。高い熱、しびれる手足。脳卒
 中が発病したのだ。当然、退院は見送ら
 れた。やとゆくりできると思つたのに、
 心の声が出そうになつた。口には出さなか
 った。前より遠くの病院に入院したからか、
 私はあまり祖母に会いに行かなくなつた。食
 事は祖父に任せ、私は一人、家で留守番する。
 本当ならもう祖母は退院して、私の隣にいら
 はずなのに。一緒にご飯を食べられるはずだ
 ったのに。冬の冷たい空気が満ちた家の中に

一人で過ごす私は、妙に虚しく思えた。冷たい水で毎日お米もといていた。何で私がかやらないければならないのか、と苦痛にさえ感じていた。そんな時、いつもありがとう。いつもごめんね。別にばあちゃんのせいじゃないじゃん。という会話が思い出される。そうだが、ばあちゃん、のせいじゃない。もう一度心の中で復唱して、私はお米をといた。

病氣も快方に向かい、ようやく退院を迎えた祖母。一年ぶりに同じ食卓でご飯を食べた。このご飯、私かとい込んだよ。いつも偉か、たね。ありがとう。と、てもおいしーいよ。

笑顔でそう言う祖母が見られ、心の底から嬉しかつた。病院の食事とは違う、家でのご飯を食べられた。ただ、満足そうに笑みを浮かべる祖母。それを見てほほ笑み合う家族。私のといたご飯で、家族が一つになれた。そんな気がした。